

KH266-H12



1200700366899

唄のひろき

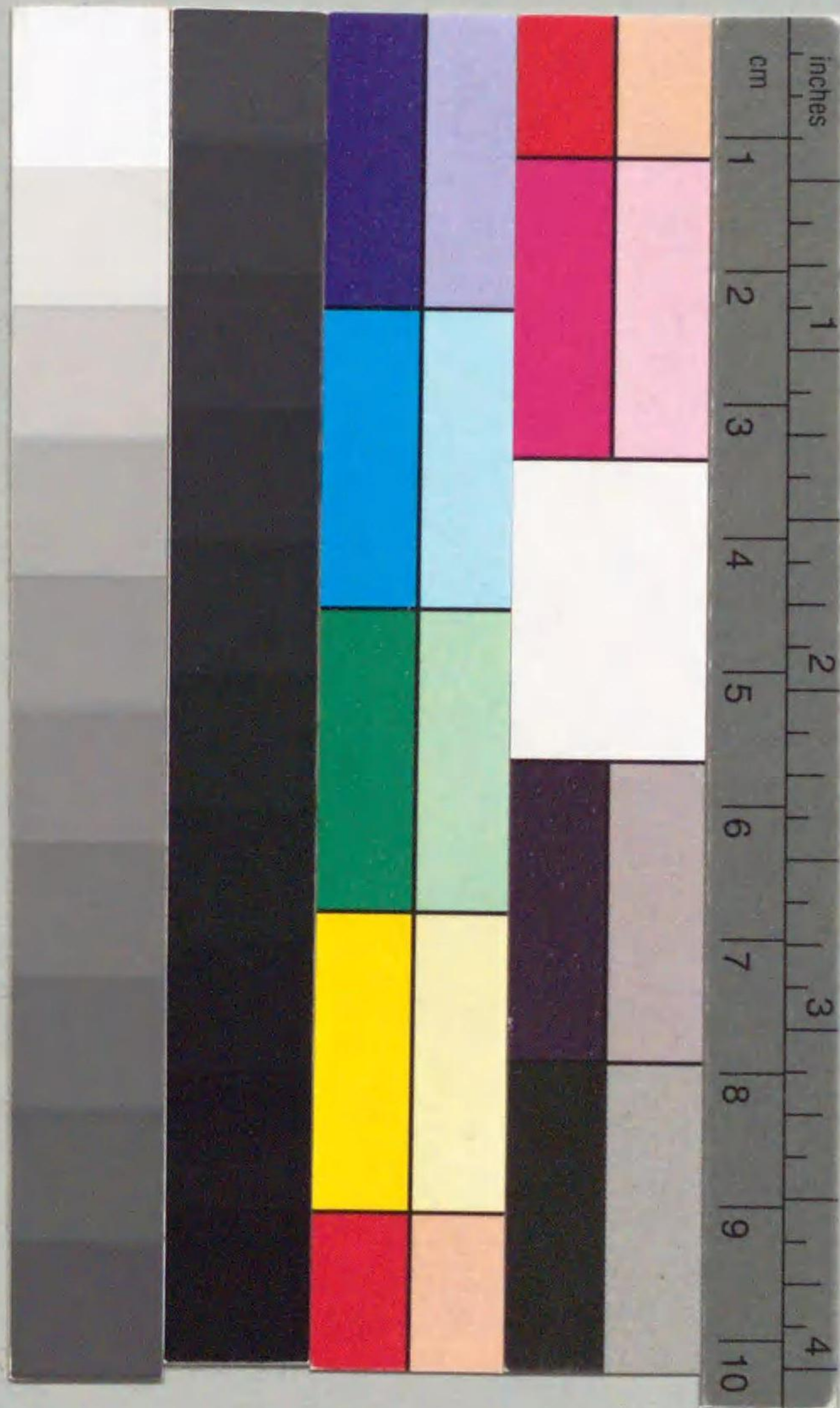
謠民秋白

2



A R S

KH266-H12



白秋民謡の言葉

蕪の二つ三つと、

鯛のひとつかみと、

たつたそれだけで代へてもらひたいのだ、

わたしのこの民謡と。

そして、歌ってもらひたいのだ。

芝居の小唄

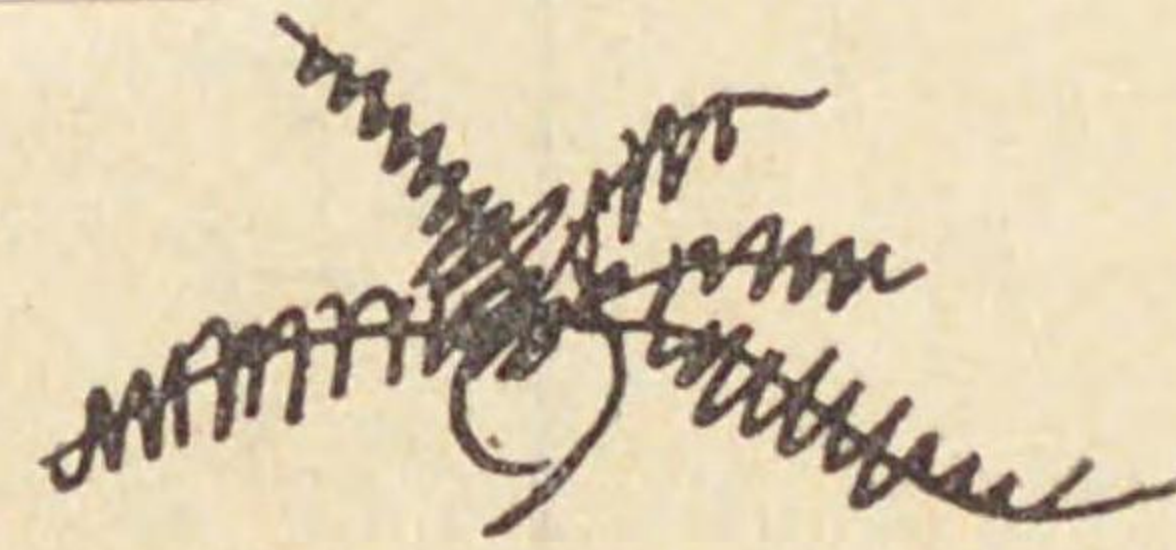
芝居の小唄

北原白秋著

KH266

H12

ii



白秋民謠

2



I種

W



1200700366899

目次

生ける屍の唄	………	三
さすらいの唄	………	三
にくいあん畜生	………	六
こんど生れたら	………	九
カルメンの唄	………	九
煙草のめのめ	四章………	二五
煙草よくよく	三章………	一八
酒場の唄	五章………	二二
戀の鳥	………	二五
別れの唄	………	二九
花園の戀	………	三五
槍持	………	四二

生ける屍の唄

「生ける屍」はトルストイの原作に成るが、先年島村抱月氏の藝術座の公演劇として改めて脚色されたものである。その劇中の小唄として、是等を私が作つた。細説すると、「さすらひの唄」はジプシイの旅情を歌つたものである。女主人公ママアシヤは須磨子がつとめた。

「にくひあん畜生」はその酒場で大勢が唄ふ唄である。

「こんご生れたら」は道化た葬式の歌である。此唄を棺の中の亡者が聽いてたまらなくなつて踊り出すと云ふ、さういふ唄をこの事で作つた。

以上、中山晋平氏が作曲した。

さすらひの唄

行こか、戻ろか、極光の下を、
露西亞は北國、はてしらず。
西は夕焼、東は夜明、
鐘が鳴ります、中空に。

泣くにや明るし、急げば暗し、
遠い燈火もチラチラと。
とまれ幌馬車、やすめよ黒馬よ、
明日の旅路がないぢやなし。

燃ゆる思を荒野にさらし、
馬は氷の上を踏む。
人はつめたし、わが身はいとし、
街の酒場はまだ遠し。

わたしや水草、風吹くままに、
ながれながれて、はてしらず。
晝は旅して夜は夜で踊り、
末はいづくで果てるやら。

にくいあん畜生

にくいあん畜生はおしやれな女子、
おしやれ浮氣で薄情もの、よ、
どんな男にも好かれて好いて、
飽いて別れりや知らぬ顔。

飽いて別れりや別りよとままよ、
外に女子が無いじやなし、よ。
何をくよくよ、明日の日もござる。
男後生樂、またできる。

男後生樂、踊らぬ奴は、
やもめ男か、いくぢなし、よ。
何をくよくよ、踊さへをどりや、
すぐに女子も来てたかる。

女子ゆるゑなら身も世もいらぬ、
どうせ名もなし、錢もなし、よ。
ままよ自棄くそ、梵天國ときめて、
今日も酒、酒、明日も酒。

酒だ、酒、酒、まだ夜は明けぬ、
明けりや工場の汽笛が鳴る、よ。
ままよ自棄くそ、一寸先や闇よ、
今宵極樂、明日地獄。

こんど生れたら

今度生れたら驢馬に乗つておいで。
驢馬はよいもの、市場へ連れて、
そこで燕麥しこたま貰ろて、
かはい女子と乗つて歸ろ。

今度こんど生うれたら金箱かねばこもつておいで。
金かねはよいもの、呉服屋こふくやを呼よんで、
そこで緋ひ繻子じゆすをどつさり買かつて。
かはい女子をなごと寝ねて暮くらそ。

今度こんど生うれたら鶯が抱たいておいで。
鶯が鳥てうはよいもの香水屋かうすゐやを呼よんで、
そこで卵たまごと品しなよく代かへて、
かはい女子をなごのおめかしに。

今度こんど生うれたら酒樽さかだるし背負しよつておいで。
酒さけはよいもの、たらふく飲のんで。
そこでまたまた卒倒そつたうして死しんで、
かはい女子をなごを置おきざりに。

カルメンの唄

是等もみな藝術座の「カルメン」劇のために作られた。細説すれば、
「煙草のめのめ」は劇中の西班牙カビラヤの街の煙草女工のうたふ
唄である。この唄をその晩までうたつて須磨子は死んだ。
「酒場の唄」は酒場で大勢で飲み且つ唄ふものである。
「戀の鳥」は須磨子の役の女主人公のカルメンがうたふ歌である。
これは歌劇カルメンの英譯本中のそれを意譯したものである。
以上、中山晋平氏が作曲した。

煙草のめのめ

1

煙草のめのめ、空まで煙せ、
どうせ、この世は癩のたね。
煙よ、煙よ、ただ煙、
一切合切、みな煙。

煙草のめのめ、照る日も曇れ、
どうせ、一度は涙雨。

煙よ、煙よ、ただ煙、
一切合切、みな煙。

煙草のめのめ、忘れて暮らせ、

どうせ、昔はかへりやせぬ。

煙よ、煙よ、ただ煙、
一切合切、みな煙。

煙草のめのめ、あの世も煙れ、
どうせ、亡くなりや野の煙。

煙よ、煙よ、ただ煙、
一切合切、みな煙。

煙草よくよく

1

煙草よくよく、横目で見たら、
好きなお方も、また煙草。
煙よ、煙よ、ただ煙。
一切合切、みな煙。

2

煙草つけよか、紅つけませうか、
紅ちやあるまい、脂である。
煙よ、煙よ、ただ煙。
一切合切、みな煙。

3

煙草たばこぶかぶか、キツスしてゐたら、
鼻はなのパイプに、火ひをつけた。
煙けぶりよ、煙けぶりよ、ただ煙けぶり。
一切いっさい合切がっさい、みな煙けぶり。

酒場の唄

1

ダンスダンスしませうか、
骨牌カルタ切りませうか、
ラランララ、ラランラ　ラララ。
赤あかい酒さけでも飲のみませうか。

ピアノ弾きませうか、
笛吹きませうか。

ラランララ、ラランラ ラララ。

赤い月でも待ちませうか。

闘牛見ませうか、

花投げませうか、

ラランラ、ラランラ ラララ。

赤い槍でも振りませうか。

女賭けませうか、

玉突きませうか、

ラランララ、ラランラ ラララ。

赤い心臓でもあげませうか。

さあさ、退散けませうか、
まだ飲みませうか、
ラランララ、ラランラ ラララ。
赤い櫓にでも乗りませうか。

戀の鳥

カルメンのうたふ小唄

捕らへて見ればその手から、
小鳥は空へ飛んで行く、
泣いても泣いても泣ききれぬ、
可愛い、可愛い、戀の鳥。

たづねさがせばよう見えす、
氣にもかけねばすぐ見えて、
夜も日も知らず、氣儘鳥、
來たり、往んだり、風の鳥。

捕らよとすれば飛んで行き、
逃げよとすれば飛びすがり、
好いた惚れたと追つかける、
翼火の鳥、戀の鳥。

若しも、翼を擦りよせて、
離しやせぬぞとなつたなら、
それこそ、あぶない魔法鳥、
戀ひし、おそろし、戀の鳥。

別れの唄

これはその初め、カルメンがうたふ小唄として作つたものの一つであるが、作曲その他の都合上舞臺には上せなかつた、ごちらにしても獨立してうたへるものなので、これもその後中山晋平氏の作曲で世に流布することになつた。

別れの唄

このまゝ別れて、それでよけりや、
氣強いおまへは、さすが男よ、
いえ、いえ、わたしは別れられぬ、
別れられぬ。

女子を見捨て、寝ざめよけりや、
つれないお前は、さすが男よ、
いえ、いえ、わたしは泣けてしまふ、
泣けてしまふ。

唇さしあて泣いたものを、
忘れるお前は、さすが男よ、
いえ、いえ、わたしは忘れられぬ、
忘れられぬ。

この眼を、この手を、この心をも、
振り切るお前は、さすが男よ、
いえ、いえ、わたしははなしませぬ、
はなしませぬ。

それでもゆくなら、わかれますが、
氣儘なお前は、さすが男よ、
いえ、いえ、わたしは死んでしまふ、
死んでしまふ。

花園の戀

これもカルメンがうたふ小唄として作つたものである。同じく中山晋平氏が作曲した。

花園の戀

くるしき戀よ、花うばら、
かなしき戀よ、花うばら、
二人は逢ひぬ、しのびかに、
顫へて、人目はばかりぬ。

くるしき戀よ、花うばら、
かなしき戀よ、花うばら、
二人は寄りぬ、今さらに、
顫へて、眼をば見合せぬ。

くるしき戀よ、花うばら、
かなしき戀よ、花うばら、
二人は泣きぬ、たえだえに、
顫へて、熱く息づきぬ。

くるしき戀よ、花うばら、
かなしき戀よ、花うばら、
二人は觸れぬ、おそろしく、
顫へて、紅く口吻けぬ。

くるしき戀よ、花うばら、
かなしき戀よ、花うばら、
二人は死にぬ、血みどろに、
顫へて、人に殺されぬ。

槍

持

「槍持」は「東京景物詩」の中から抜いた。これは三絃樂の舞踊にふさはしいものである。これを踊つてくれる歌舞伎役者はないか。これは陽氣なやうで、その實は淋しい私の心の反影であつた。

槍 持

槍は鏽びても名は鏽びぬ、
殿につきそふ槍持の、
槍の穂尖の悲しさよ。

槍は槍持、供揃、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

けふも馬上の寛濶に、
殿は伊達者の美しい男、
三國一の備後様、
しんととろりと見とれる殿御。
槍は槍持、銀なんぼ。
供の奴さへこのやうに、
あれわいさの、これわいさの、取りはずす、
やあれ、やれ、危なしやの、槍のさき。

槍は鏽びても名は鏽びぬ、
殿のお微行、近習まで
身なりくづした華美づくし、
槍は九尺の銀なんぼ、
けふも酒、酒、明日もまた、
通ふしだらの浮氣づら、
わたる日本橋ちらちらと、
雪はふるふる、日は暮れる、
やあれ、やれ、冷たしやの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

雪はふれども、ちらほらと
河岸の間屋の灯が見ゆる、
さてもなつかし、飛ぶ鷗、
壁のしたには廣重の
紺のぼかしの裾模様、
殿の御容量に、ほれほれと、

わたる日本橋、槍のさき、
槍は擔げど、空のそら、
澁面つくれど供奴、
ぴんとはねたる附髭に、
雪はふるふる、日は暮れる。
やあれ、やれ、やるせなの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

槍は鏽びても名は鏽びぬ。
殿につきそふ槍持の、
槍の穂さきの悲しさよ。
いつも馬上の寛濶に、
殿は伊達者のよい男、
さぞや世間の取沙汰に、
浮かれ騒ぐも女なら。
そこらあたりの道すぢの、
紺の暖簾も氣がかりな、
槍は九尺の銀なんぼ、

槍を持つ身のしみじみと、
涙流すもつとめ故、
さりとは、さりとは、供奴、
雪はふるふる、日は暮れる。
やあれ、やれ、しよんがいな、槍のさき。

さすらひの唄

定價 參拾錢

有 所 權 版

刷印日二十月十年一十正大
行發日五十月十年一十正大

秋 白 原 北 者 作 著

者表代スルア社會資合
雄 鐵 原 北 者 行 發

號五地新町張尾座銀區橋京市京東

郎 五 井 國 者 刷 印

七ノ三町屋寄款元區橋京市京東

子 金 本 製

發行所
東京市京橋區
銀座尾張町
會合
社資
ア
ル
ス
電話銀座二一九三番
振替東京二四八八番

白 秋 民 謠

第一輯	第二輯	第三輯	第四輯	第五輯	第六輯
空に眞赤な	さすらひの唄	朝草刈り	月のパヤ	椰子の日永	岬の夕焼

定價各冊參拾錢

送料各冊貳錢

トツレフンパ秋白

第一輯	月光微韻	短唱
第二輯	落葉松	短章
第三輯	初冬の星	短章
第四輯	動き來るもの詩集	
第五輯	薄陽の旅	民謡體章
第六輯	雀の頭巾	小唄

北原白秋氏著及裝

定價各册參拾錢
送料各册貳拾錢

白秋童謠

第一輯	螢	こ	莓	小杉末醒氏畫
第二輯	夢	の	小函	前川千帆氏畫
第三輯	こんこん	小山		小杉末醒氏畫
第四輯	お祭	の	ころ	木村莊八氏畫
第五輯	お月夜	の	うた	森田恒友氏畫
第六輯	ねんね	の	お鳩	木村莊八氏畫

北原白秋氏著

菊版 定價各册參拾五錢
二度刷美本 送料各册二錢

繪入童謡集

北原白秋氏著

森田恒友氏裝 初山滋氏畫
清水良雄氏畫 矢部季氏畫

こんぼの眼玉

定價 壹圓九拾錢
送料 拾七錢

子供が手を叩き足を跳らして喜び歌ふ唄はこれです。殊に本書の
誇すべきは童謡一篇ごとに燦然たる原色及び色刷の挿畫を一葉
づゝ附せることであります。

北原白秋氏著

初山滋氏裝及畫、 矢部季氏挿畫

兎の電報

定價 壹圓九拾錢
送料 拾七錢

本書はこんぼの眼玉の姉妹篇にして白秋氏の童謡三十篇に二畫伯
の力作になる華麗なる挿畫三十六葉を原色及び色刷として各篇ご
とに收め興趣眞に無量

英國童謡 あざま・ぐすう

北原白秋氏譯

口畫原色版六葉凸版拾數葉

あざま、ぐすうは英米の子供達に昔から愛されてゐる世界的の
童謡集でございます。この童謡の中にはお月様を飛び越ゑる牡
牛のダンスや「パンとお煎餅」さうなるロンドンのお寺の鐘や
拇指よりも小さな豆つぶの旦那様やさうした、それは不思議で
美しくおかしくて馬鹿々々しくて、面白くて、笑ひたくは
ては歌ひたくなる童謡ばかりを白秋氏が實に輕妙な日本の民謡
調に譯されたものであります。

四六版色刷極美本

定價 貳圓八拾錢
書留 送料 拾七錢

繪入童謡
祭の笛

北原白秋氏著及裝

前川千帆氏畫

四六判絹裝極美本

本集は、白秋氏最近の童謡九十篇を收むるものにて、本集につき特記すべきは、氏が藝術自由教育の見地より、子供が楽しんで歌ひながらに、自づからその智慧をこまかく、輝やかに、その智識を深く廣く導くために作られた新風の童謡二十篇を加へられたことである。白秋氏の美くしい新作童謡を知り併せて教育的に一生面を拓いた新童謡を知らんとする人々に特にお薦めする。

定價貳圓八拾錢

送料拾七錢

